

陳舜臣さんを語る会通信

NO.96

Jan.

2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年1月10日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

生誕百年を見据えた 福間良明著『司馬遼太郎の時代』

本号では福間良明『司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義』（中公新書 2720）を、本文の興味深い箇所を抜粋転載するという形で紹介いたします。遼太郎の「遼」は公式の表記では「しん」（二点しんにょう）です。なお、同著「あとがき」に、「2022年秋、司馬遼太郎生誕百年を前にして」とあります。

■司馬遼太郎 / 1923. 8. 7-96. 2. 12

（編集委員 橋雄三）

福間良明著『司馬遼太郎の時代』

歴史と大衆教養主義

傍線は編集委員の加筆

キャッチコピー

『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など、売上げが累計一億冊を超える大ベストセラー作家司馬遼太郎。日本史を主たるテーマに、人物を個性豊かに、現代への教訓をを込めて記した作品は、多くの読者を獲得。「司馬史観」と呼ばれる歴史の見方は論争ともなった。本書は、司馬の生涯を辿り、作品を紹介しつつ、その歴史小説の本質、多くの人を魅了した理由を20世紀の時代とともに描く。国民作家の入門書でもある。

目次

- はじめに
- 序章 国民作家と傍流の昭和史
- 第1章 傍系の学歴と戦争体験
- ―昭和戦前・戦中期―
- 第2章 新聞記者から歴史作家へ
- ―戦後復興期―
- 第3章 歴史ブームと大衆教養主義
- ―高度成長とその後―
- 第4章 争点化する「司馬史観」
- ―「戦後五〇年」以降―
- 終章 司馬遼太郎の時代
- ―中年教養文化と「昭和」―
- あとがき

「あとがき」より

戦国期や幕末・明治期を扱った司馬の主要長編や史論集を読み返してみると、乱読で終わっていた若いころには気づかなかったことも、目についた。

そのひとつは、司馬の戦争体験との関わりだった。ここ二〇年ほど、戦争体験論や戦争観の変容について研究することが多かったため、おのずと司馬の戦車兵体験を念頭に置きながら、作品を読み進めた。それゆえか、幕末を扱った『竜馬がゆく』…、戦国・織豊期をテーマにした『国盗り物語』…、さらには鎌倉幕府成立期を描いた『義経』など、いずれも、その物語に司馬の昭和陸軍への憤りが投影されているように感じられた。主人公のヒロイズムばかりに目が行きがちだった若い頃には、そのことはあまり見えていなかった。ちなみに、かつては、『坂の上の雲』にそれほど興味を持たなかったが、こうした視点で読み解いてみると、昭和

和陸軍に対する司馬の怨念を裏側から照らし出す作品に思えるようになった。むしろ、司馬の歴史叙述は、アカデミックな歴史学に照らせば、必ずしも正確ではない。だが、それが史実に適うかどうかよりも、なぜ司馬がそのような物語をあえて選び取ろうとしたのか。そこに、昭和に対する司馬の憤りが、どう込められているのか。言い換えれば、作品における明治・幕末・戦国の像を「ネガ」として捉えることで、司馬がいかなる「ポジ」をなぜ描こうとしたのか、そのことへの関心が、自分のなかで徐々に鮮明になっていった。

順位	書名	刊行年	累計発行部数
1	竜馬がゆく	1963	2477
2	坂の上の雲	1969	1976
3	街道をゆく	1971	1219
4	翔ぶが如く	1975	1202
5	国盗り物語	1965	755
6	項羽と劉邦	1980	725
7	関ヶ原	1966	626
8	功名が辻	1965	531
9	世に棲む日々	1971	523
10	菜の花の沖	1982	513
11	花神	1972	486
12	播磨灘物語	1975	471
13	この国のかたち	1990	416
14	峠	1968	399
15	城塞	1971	347
16	新史太閤記	1968	297
17	箱根の坂	1984	272
18	胡蝶の夢	1979	253
19	義経	1968	250
20	最後の将軍	1967	240

発行部数は単位：万、以下切り捨て

同著より抜粋加工転載



中公新書表紙

福間良明著『司馬遼太郎の時代』内容紹介

本文より抜粋転載

小見出し及び傍線は編集委員の加筆

【『坂の上の雲』】

■『産経新聞』夕刊に、一九六八年（昭和43年）4月22日から七二年（昭和47年）8月4日まで一二九六回にわたり連載された。

明治は、極端な官僚国家時代である。われわれとすれば二度と経たない制度だが、その当時の新国民は、それをそれほど厭うていたかどうか。社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた。そういう資格の取得者は常時少数であるにしても、他の大多数は自分もしくは自分の子がこの気にさえなればいつでもなりうるという点で、権利を保留している豊かさがあった。

しかも一定の資格を取得すれば、国家生長の初段階にあつては重要な部分をまかされる。大げさにいえば神話の神々のような力をもたされて国家のある部分をつくりひろげてゆくことができる。…

この時代のあるさは、こういう楽天主義からきているのであろう。

このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽天主義の物語である。やがてかれらは日露戦争とい

うとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつっこんでゆく。最終的にはこのつまり百姓国家がもったこつけないほどに楽天的な連中が、ヨーロッパにおけるもつともふるい大国の一つと対決し、どのようにふるまったかということを書くようにおもっている。楽天主義たちは、そのような時代人としての体質で、前のみを見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいているとすれば、そのみをつめて坂をのぼってゆくであろう。（「あとがき」）（p.127-128）



文春文庫版表紙

【司馬作品中、随所に入る「余談だが」】

司馬作品は見ようによつては、さほど読みやすいものではない。司馬の歴史小説では、主人公の勇躍や軌跡に焦点が当てられるだけではなく、随所で「余談だが」といった断りがなされ、史的背景の説明が多く挿入される。それも、物語と同時代の歴史ばかりを扱うわけではない。幕末維新时期を主題とする作品であっても、

戦国期や昭和戦前期、さらには中国史・欧州史に話が及ぶことも多い。司馬は作品を構想し始めると、史料を膨大に買い漁るため、各地の古書店から関連史料が消えてしまうという逸話は、よく知られている。それに基づく「余談」が、作品中にちりばめられていた。読者は必然的に、人物譚への没入を、たびたび余談によつて断ち切られることになる。

だが、むしろその余談が、多くの読者を惹きつけた。作家の田辺聖子は、司馬の一連の作品を振り返りながら、その余談に触れる愉しみを綴っている。元プレジデント社社長の作家・諸井薫も、「司馬作品は小説ではなく、傑出した歴史読物として読まれたからこそ、これだけ幅広いビジネス・スマン層の強い支持を得られたのではないだろうか」と述べ、余談に魅了される読者の存在を示唆している。（p.4-5）

【司馬作品は細切れの読書向き】

書籍の文庫化もそれを後押しした。司馬の歴史小説の多くは、一九六〇年代から七〇年代にかけて執筆されたが、多くの読者を持続的に獲得するようになったのは、文庫化が進んだ一九七〇年代半ば以降である。（p.8）

司馬作品は主として一九七〇年代半ば以降、新潮社や文藝春秋から続々

と文庫化された。単行本が一定期間を経て版元に返品されるか、棚に埋もれてしまうのに対し、文庫本の場合、出版社ごとの文庫のコーナーに持続的に陳列される。そのことを考えれば、文庫というメディアが、司馬の読者をどう生み出してきたのかを問う必要もある。（p.10）

断片的に余談が差し挟まれた司馬作品は、乗り換えや下車のために短時間で本を閉じなければならぬサラリーマンたちにとって、細切れの読書を可能にするものであり、その通勤スタイルに適していた。さらに言えば、そうした読書が可能になったのも、廉価で携帯しやすい文庫というメディアがあつたことだった。（p.177）



福間良明著『司馬遼太郎の時代』紹介（続）

司馬遼太郎、入営から終戦まで（『司馬遼太郎の時代』をもとに編集委員作成）

年 月	事 項
1943年9月	東条英機内閣は理科系・教員養成系以外の大学・旧制高校・旧制専門学校在学生の徴兵猶予措置の停止を決定し、満20歳に達した学生・生徒は同年12月に入営(陸軍)・入団(海軍)することとなった。
1943年9月	大阪外国語学校を仮卒業(翌年9月に正式卒業)
1943年12月	兵庫県加東郡河合村（現：小野市）青野が原の戦車第19連隊に入隊。初年兵教育を受ける
1944年4月	満州の四平陸軍戦車学校に入校
1944年12月	四平陸軍戦車学校を卒業し、見習士官として戦車第一連隊(満州・牡丹江)に配属
戦争最末期	司馬が所属した戦車第一連隊は、本土決戦に備えて栃木県佐野に移る。陸軍少尉で終戦

【司馬遼太郎の兵役体験】

司馬は大阪外国語学校を繰り上げ卒業し、一九四三年十二月、入営する。一年半余であったが、戦車兵としての兵役体験の中で軍の技術軽視や組織病理に憤りを感じるようになる。

戦車兵としての体験が、司馬の戦後の著述を大きく規定付けることになる。(p.60)

【ノモンハン事件、執筆を断念】

■ノモンハン事件 ノモンハンとは中国東北部の北西辺、ハルハ河畔の地。満州国とモンゴル国との国境紛争で、一九三九年五月から九月、関東軍はソ連軍と激突、大敗を喫す。

文藝春秋で司馬の担当編集者だった半藤一利によれば、司馬は「参謀本部を主人公にする作品を書こうか」と思っているんだがね」といったアイディアを語っており、その後、ノモンハン事件に特化した作品を考えるようになった。関係の資料も、一通り見渡していたという。

だが、司馬はその後、「もうノモンハン事件の小説は書かない」と言うようになった。半藤は、「自分で調べられ、事変や戦車や参謀本部と関東軍の参謀たちの愚劣さ、悪質さについては、あますところなく話してくれるのに、ついに話だけで、ペンをとろうとはされなかった」と記している。半藤がなおもつよく執筆

を求めても、寂しく笑いながら「ノモンハンを書け」ということは、私に死ねというのと同じことだよ」と答えていた。

半藤はその要因として、鍵となる取材対象者との関係悪化をあげている。司馬はノモンハン事件当時の作戦課長・稲田正純(当時大佐)や対ソ情報担当・完倉寿郎(当時大尉)、技術本部(戦車担当)の原乙未生(当時大佐)のほか、前線で戦った歩兵第二十六連隊長・須見新一郎(当時大佐)に聞き取りを重ねていた。

須見は、軍上層部が机上で作戦を立てるばかりで、現地からの情報を顧みず、結果、甚大な損害を招いたことに、激しい憤りを覚えていた。それだけに、司馬が元大本営参謀・瀬島龍三と『文藝春秋』(一九七四年一月号)誌上で対談したことに立腹し、「よくもあんな卑劣な奴と楽しそうに対談をして、私はあなたを見損なった」と司馬に絶縁を伝えたという。そのことが引き金になって司馬は書く意欲を失い、この主題について筆を折ることにしたというのが、半藤の推測である。……。

司馬が、戦国や幕末・維新、明治という遠い時代を選び、そこから昭和を照らし返そうとしたのも、時間的な近さゆえの「なま乾き」を回避しようとしたためであったのだろう。(p.132-134)

「藤田嗣治《ハルハ河畔之戦闘》の2ヴァージョン」より転載

cardiac.exblog.jp

近藤史人著の《藤田嗣治「異邦人」の生涯》によると、藤田は、この戦いに参加した陸軍中将・荻洲立兵から「ノモンハン事件」の実相を聞かされ、戦死した部下の霊を慰めるために画を描いてくれと依頼された。

このため藤田は満蒙国境を訪れて、この画を描き、一九四一年七月の第二回聖戦美術展に出品し、非常に高い評価を受けた。

ところが藤田は同名の画をもう一枚描いていたという。それを実際に見た荻洲中将の息子・荻洲照之によると、それはソ連の戦車からは発射される銃弾によって、死体が累々と積み重なっていく画だった。



聖戦美術展に出品された
藤田嗣治《ハルハ河畔之戦闘》(部分)

福間良明著『司馬遼太郎の時代』紹介（続々）

【教養主義及び大衆教養主義】

司馬遼太郎作品の読者獲得には、

高度成長期以降の大衆教養主義を
読み込むことができた。」「(文学・

思想・歴史などの) 読書を通じた人
格陶冶」という教養主義の規範は、
大正期から一九六〇年代の旧制高校・
大学キャンパスで広く見られた。だ
がその価値観は、学歴エリートや知
識人のみならず、義務教育を終えた
だけの勤労青年たちのあいだでも、
少なからず共有されていた。難解な
哲学書や思想書を手にはしないまで
も、文学や思想、社会批判に触れよ
うとする営みがあった(大衆教養主
義)。司馬作品をめぐる読者たちの
受け止め方も、これに連なるものが
あったのかもしれない。

だが、教養主義は一九六〇年代末
にもなると明らかに衰退の一途をた
どった。大学知識人を糾弾した大学
紛争を通じて、「知」「教養」への
憧憬は社会的に衰退し、消費文化の
浸透がそれに拍車をかけた。にもか
かわらず、司馬作品はその後も多く
の読者を獲得し、「歴史という教養」
への関心をかき立てた。

折しも、一九七〇年代以降は、大
衆歴史ブームが盛り上がりを見せた
時代だった。(p.67)

二十数年前の若い時分を振り返っ
て、当時浸った教養を懐かしく思い

返すこともあっただろう。「かつて
の若者」の教養への憧憬は「昭和五
〇年代の中年」の大衆歴史ブームに
溶け込んでいたのである。(p.169-
170)

【司馬作品の主人公は従来のしがらみ
に囚われずのびやかに行動】

司馬の主要作品の多くは、高度成
長中後期に刊行が集中していた。

それはおそらく、偶然ではないだ
ろう。坂本竜馬、斎藤道三、羽柴秀

吉が、従来のしがらみに囚われるこ
となく、のびやかに行動し、自由な
交易や社会を切り拓こうとするさま
は、経済水準の向上と消費文化の広
がりが見え、経済状況が右肩上が
りの一九六〇年代の日本の社会に重
なっている。(p.180)

司馬の歴史小説は生活水準の上昇
を実感し、今後の経済的な進展を期
待できた時代状況に通じるものがあ
った。(p.181)

【映画化、テレビ化】

司馬作品の映画化も進んだ。『燃
えよ剣』(松竹、一九六六年)、『屍
喰え孫市』(大映、六九年)、『幕末』
(東宝、七〇年)など、司馬作品を原
作とした映画は、一九七〇年までに
一一本にものぼった。

むしろ、司馬作品が広く知られる
うへでは、NHK大河ドラマの原作
となったことが大きかった。一九六

八年の『竜馬がゆく』を皮切りに、
『国盗り物語』(七三年)、『花神』
(七七年)が放映された。その後も
『翔ぶが如く』(九〇年)、『徳川慶
喜』(九八年)、『功名が辻』(二〇
〇六年)が大河ドラマ化され、司馬
原作の作品は計六本に及ぶ。…。

必然的に、司馬作品の大河ドラマ
化は、全国の幅広い層にその知名度
を高めることにつながった。(p.188-
189)

【ビジネスマンの「ガス抜き」】

プレジデント社社長の諸井薫は、
司馬作品を「辛い浮世を生き抜く現
代ビジネスマンにとって、こんな格
好なカタルシスもない」と評して、
以下のように述べている。

ビジネスマンは心ならずも周囲に
気兼ねして自分を殺す日常の中で生
きているだけに、マイペースを貫く
偏執狂に近い人間の生き方に憧れる
傾向があるが、司馬作品の主人公に
はそのタイプが多い。竜馬しかり、
土方歳三、河井継之助、大村益次郎、
数え上げれば、司馬好みの男達には
あきらかに共通するものがある。

だが、見方を変えれば、これらは
しがらみの多い会社生活をめぐる
「ガス抜き」を促すものでもあった。
現実の企業勤めのなかで、大村益次
郎や坂本竜馬のように「マイペース」
や「合理性」に固執することは困難
だった。だが、そうした願望を司馬

作品の主人公に投影することで、ま
だしも救われる気持ちを抱くむき
があったことは、想像に難くない。

読者たちは、自らの願望を司馬作
品に重ねることで、現実社会との折
り合いをつけていた。(p.186-187)

【『坂の上の雲』は小説でも史伝でも
なく、単なる書きもの】

『坂の上の雲』という作品が、小
説でも史伝でもなく、単なる書きも
のであると私がしばしば、それもく
どいほど断ってきたのは、自分自身
が小説という概念から解放されたい
ためであった。(『歴史のなかの日本』)

この作品は、小説であるかどうか、
じつに疑わしい。ひとつは事実にと
束されることが百パーセントにちか
いからであり、いまひとつは、この
作品の書き手ー私のことだーはどう
にも小説にならない主題をえらんで
しまっている。(「あとがき四」)

秋山好古(阿部寛)
真之(本木雅弘)兄弟

